

今なお残る

ほう ざ こん せき 砲座の痕跡



ね じめ ほう だい あと 根占砲台跡

(肝属郡南大隅町辺田)



え ども ころ
江戸時代の終わり頃 (約 150 年前), 日本の近くの海
に現れ始めた西洋の国々の攻撃から薩摩を守るために,
きんこうわん うみぞ
錦江湾の海沿いに造られた砲台の一つです。

はくくつ
今回の発掘調査の結果, 攻撃を防ぐためにつくられた
いしがき
石垣が良好に残っていることがわかり, その石垣の積み
たいほう だいざ こんせき
方や大砲をのせた台座の痕跡などもわかってきました。



い せき さつえい
海側から見た遺跡全景 (空中撮影)

ね じめ ほう だい 根占砲台の歴史

19世紀初頭の薩摩藩近海には、西欧諸国の艦船が頻繁に出没し、対外的な緊張が高まっていた。当時の藩主である島津齊興はこのような状況に対応するため、藩内各地の沿岸に砲台を築かせました。根占砲台も生麦事件後のイギリス艦隊来航に備え、砲台の拡幅工事が行われ、当時の石垣が今も残っています。対岸の指宿や山川の砲台とともに、錦江湾への艦船の侵入を阻止する目的でしたが、その力を発揮することなく西南戦争を迎え、その役目を終えました。



根占砲台跡上空から錦江湾を望む

